

## 浅野研眞研究（その2） ～『佛陀』誌にみる思想と行動～

菊池 正治

### An idea to see in the monthly magazine 'Buddha' of ASANO KENSIN and action

Masaharu KIKUCHI

【抄録】本論文は、戦前社会福祉文献の古典に属する『日本佛教社会事業史』の著者である浅野研眞の思想と行動を明らかにすることを目的とした。このための史料として彼の個人雑誌『佛陀』を取上げ、特に、晩年期のそれについての検討を行った。周知のように浅野は社会事業を専門に手掛けた人物ではなく、学問的ベースに社会学をおき、プロレタリア教育運動、仏教革新運動、仏教社会学、仏教社会事業などの幅広い分野において研究と活動を行っている。そして、従来の浅野に関する先行研究では、彼の進歩性や革新性にスポットが当てられ語られることが多かった。この指摘には間違いはなく、筆者も浅野に関する研究において同様のことを言及した。

ところが、『佛陀』誌上での浅野の晩年期の思想は、先行研究の評価とは全く異なったものに変貌しており、国家主義に接近、変質し、仏教の戦争協力を積極的に訴えるものになった。この点の検討が今日までなされなかったのは、浅野研眞研究の大きな欠陥と言わざるをえない。その理由の一つに浅野の晩年期の活動を記した『佛陀』誌の全貌が明らかにされなかったことに起因するところが大きいと考える。今回、幸いにも多くの関係者の協力を得てそれが全巻揃い、通観することが可能になった。よって、本論においては、『佛陀』誌について若干の書誌学的検討を行い、加えて可能な限り同誌上での浅野の諸論稿を中心に、彼の晩年期における思想と行動の変貌について言及し、その人物研究に関する空白の部分に照射することにより、浅野研眞の人物像の再評価を行った。

【キーワード】浅野研眞、雑誌『佛陀』、仏教思想、仏教革新運動、仏教社会事業

#### はじめに

20世紀は、仏教関係の雑誌が数多く発刊されており、『大法輪』誌のように戦前から今日まで継続して発刊されているものも存在している。そして、これらの多くが近代仏教史の貴重な史料であることに間違いはないが、残念ながら一部の雑誌を除いてその全貌が明らかにされていないのも事実である。本稿で取り上げる浅野研眞の個人雑誌『佛陀』も、これまで部分的にはその存在と内容を確認することはあっても全巻を通じて閲覧することはできなかった。したがって、浅野研眞について

の先行研究では、彼の前半期の思想と行動を通じての評価であり、後半期、特に晩年期のそれについては全く手つかずの状況であった。よって、その評価も不十分なものとならざるを得ず、これまでなされた先行研究における浅野評価は、彼の前半期での部分的なものであった。

幸いにも、今回、『佛陀』誌の全貌を明らかにすることができた。そこで、本論ではこれに発表した浅野の論稿を中心に彼の晩年期の思想と行動を検討し、浅野研究の空白部分を埋め、全体像の評価に迫ることを目的としている。同時に、本論の研究を通して『佛陀』誌の内容が少し明らかになり、今後の仏教

ジャーナリズム史研究の一助になればとも考える。このために、参考までに『佛陀』誌の全貌を目次で示しておく。

## I 雑誌『佛陀』創刊の背景

本論に入る前に浅野の『佛陀』誌発刊に至るまでの執筆活動と行動について概略的ではあるが少し触れておくこととする。浅野が日本大学文学部社会学科に入学したのは1922年の22才の時であり、執筆活動は同大学の在籍中にすでになされている。それは『社会批判』パンフレット第一冊「インターナショナル発達史論」(1922年)、翌1923年には同パンフレット第三冊「社会思想と社会運動」、同パンフレット第五冊「マルクス哲学の貧困—ブルードン氏の貧困の哲学への答弁—」などを著書あるいは翻訳書として上梓している。研究者としての出発の時点より、彼の研究的視点がすでにマルクス主義に強い関心を示していたことを前掲の業績名が物語っている。そして、この視点が、その後の彼の行動にも端的に表明されることとなり、とりわけ、プロレタリア教育運動との関係では、マルクス主義に立脚した研究と実践を展開し、浅野の前半期の大きな足跡であった。この分野における評価については、教育労働運動史研究において既に明らかにされているので、ここでは先行研究に譲ることとする<sup>1)</sup>。

さて、浅野が仏教へ関心を持つようになった経緯について説明しておく。「真宗大谷派の一貧寺に、百姓上りの一僧侶の二男として生れた私、一時、非常な感激を以て大徳僧堂に雲水修行をした私—この私は、多くの寺院生活の体験を持ち、仏教の影響下に生長して来たものであることを告白<sup>2)</sup>しているように、環境的に真宗寺院の出身者であること、青年初期に京都・大徳寺にて雲水修行を体験していることなどにより、早くから彼の思想形成にそれが影響を与えたことを自ら告白している。浅野が独自の仏教論(思想)と仏教

革新運動を実践する本格的な時期は、教育労働運動に対する国家権力による外圧的な弾圧と、運動内部での対立が、彼をして自然にこの分野から足を遠くさせていった1932年以降のことである<sup>3)</sup>。このことは、浅野の著述活動の変遷にも明瞭に示されているところであり、これ以降、特に仏教(宗教)に関する論稿と随筆などが多数を占め、あわせて仏教界での活動が表面化している。

浅野の仏教に関する著述活動は、彼の主力が教育労働運動にあった最中の1927年6月より連続5回にわたって歴史社会的な立場から執筆された「一向一揆考」(雑誌『現代仏教』)が初見である<sup>4)</sup>。教育労働運動に関する研究と実践と、同時並行して仏教に関する論稿も発表している事実より見れば、浅野にとって、元来、仏教への関心は早い時期より存在しており、それがとりわけ、1932年以降、教育労働運動の環境の変化と、宗教界を席卷した昭和初頭の反宗教運動やその後の仏教復興運動を契機として仏教への研究と実践に傾注したと考えられる。

反宗教運動に対する浅野の態度は、『社会の変革過程と宗教』や『無神論と反宗教運動』(以上、大雄閣 1932年刊)の著述に示されるように、この運動に反応し、現代仏教、とりわけ、既成教団や寺院に対して批判的な立場をとっている。すなわち、浅野は、宗教や仏教を全面的に否定するのではなく、特に大乘仏教の教理と、ここから発露される仏教の社会实践の現代的意義を承認し、この立場に立った思想と運動とを展開した。

浅野はマルクス主義の宗教否定を「宗教が支配階級の統治機関として利用される場合～また実際にそれは多い～それは全く『民衆にとつて阿片である』に相違ないのだ。宗教反対は、邪悪なる既成宗教への反対である。かかる反対は又、所詮、否定を伴わしめる。即ちかかる場合、それは外道の克服である。迷信の否定である」<sup>5)</sup>として、「外道や迷信としての宗教」がマルクス主義や反宗教運動陣営

の否定・批判の対象であると考えた。浅野の仏教批判は、外道化・迷信化したと捉えた既成仏教に対してのそれであり、その内容は「生ける屍」<sup>6)</sup>との表現の如く厳しいものであった。しかし、浅野は仏教の原理性については、その存在を承認する立場に立ち、大胆にも佛陀とマルクスの思想的立場に「同一性」を認めている。

私は、むしろ、佛陀とマルクスとの比較に於て、可なり多くの同一性を発見するものだからである。勿論、佛陀とマルクスとの時代は、余りにも遠く隔たつてゐる。従つて時代環境は、余りにも甚だしき差異を持つてであろう。佛陀の『四姓平等』の叫びが、かのマルクスの『社会変革』の叫びにまで進展し来つたことは、深き思想史的同一性を表示せるものと云わねばならぬ。若しそれ、佛陀に於る所謂『衆生の慈悲』と、マルクスに於る云はば『民衆への愛』との比較に至つては、社会状態を背影として見る限り、根本的な差異を認むることが出来ない<sup>7)</sup>。

浅野にとってのマルクス主義からの宗教批判・否定は、これを必然的な事象として受容しながらも、その原理性においては宗教・仏教の存在を否定するものではないとする解釈に立った。したがって、彼の宗教・仏教批判は、マルクス主義の立場に立ちつつも、それを独自の思考により、マルクス主義は宗教の全否定ではないとの解釈をなし、その思想において両者は「同一」であるとして既成仏教の「外道化・邪教化」したその実態への批判を投げかけ、あるべき大乘仏教の、また、その仏教教団の姿を追求しようとした。しかし、浅野は後年において「私は十数年前から、邪教を地球上から無くするといふ事を考えて来てゐるのであるが、丁度その時分に、この国には反宗教運動なるものが起つた。そして実は私も、その運動に好意をよせた。然し私は元来、正しくない宗教に反対して来てゐるのだから、その一派の奉信するマルクス、及

びその友人のエンゲルス、またその理論を実践したレーニンなどの宗教に対する考え方には、最後に一致しない所があつた」<sup>8)</sup>として、前述の指摘と異なりマルクス主義とは一線を画する考えを示した。

反宗教運動に対する仏教側の動向はどうであつただろうか。多くの既成仏教教団は、その動向を黙して語らずの態度に終始し、嵐が通り過ぎるのを静観した。ただし、若き仏教者の中には、これに敏感に反応した。1931年「我等は、全既成宗団は、佛教精神を冒瀆したる残骸的存在なりと認め、之を排撃して佛教の新時代的宣揚を期す」として妹尾義郎により新興仏教青年同盟が、また、同年に浅野も関係した高楠順次郎を委員長とする全日本仏教青年会同盟が結成されている。さらに、翌年には友松円諦や浅野を中心に仏教を社会経済史的観点から研究する組織として仏教法政経済研究所（所長 滝本誠一郎慶大教授）が創設された。これらの若き仏教者たちの行動は、時代社会に敏感に反応し、まさに「形骸化」した既成教団への批判者として仏教革新を志向した点では共通していた。

その中の一人として浅野が存在しており、マルクス主義に立脚しつつも宗教全否定の陣営とは立場を異にし、批判的ではあるものの仏教擁護の立場をとり、既成仏教に対して仏教革新を訴え続けた。

宗教界を席卷した反宗教運動は短期間のうちに収束し、上述のような一部の動向を除いて仏教界は何事もなかったように、それどころか、その後の非常時への突入に乗じてなされた「日本精神」の流布により、空前の「仏教ブーム」が招来し、仏教復興があたかも実現したかのような錯覚の中に安住することとなった。「仏教ブーム」に対しての浅野は、批判的態度をとった。後述するように、『佛陀』誌上に「真の佛教復興」（第2巻第9号）、「佛教復興批判」（第2巻第11号）、「佛教復興以後」（第3巻第1号）などを発表することにより、その立場を表明している。

## II 雑誌『佛陀』の発刊と体裁

以上のような浅野の思想的背景と、宗教界を取巻く昭和初頭の状況のもとで個人雑誌『佛陀』が1933年9月に創刊されている。創刊号の編輯後記に「これは主として大乘佛教の社会理論及び実践に関する研究を企図」するものであることを記している。そしてこの種の研究こそが現代社会不安に対処する大乘仏教徒の使命であるとも指摘している。世界大恐慌後の国内における大量の失業者の創出、農山村の疲弊、欠食児童の存在等々の社会の相を浅野は「三界無安猶如火宅」と捉えた。法華七喩の「火宅」と現実社会を規定し、これに対する「マハナヤ佛教は、如何に社会を觀じ、如何にその世界觀を規定し、如何に佛教的社会信条なり社会案なりを設定すべきであろうか」として、大乘仏教の役割とその存在意義を理論的・実践的検討を通じて明らかにすることが本誌の目的であるとした。

『佛陀』誌は、誌友とともに毎号浅野も執筆しており、企画から出版までのすべてを彼自身が手がけている。講演活動や資料収集などで東奔西走の多忙な日々、加えて腎臓病の持病に悩まされながらの出版業務は、浅野に大きな経済的負担と精神的・肉体的重圧をもたらしたであろうが、各々の論稿には必ずしも論理的とは云えないものの自由な発言と浅野の本音と思える思想が迸っている。彼をしてそこまで突き動かした動機は、当時の宗教・仏教界を巡る状況に対する彼の旺盛な批判精神と大乘仏教徒としての仏教への帰属意識が存在していたからであろう。

『佛陀』誌は1933年9月から1939年6月まで、毎月一回発刊され通巻69号を数える。休刊は1939年5月の一回のみである。その理由を病気のためと記しているが持病の腎臓病がかなり悪化していたと推察できる。本誌の体裁は、創刊号から第3巻第1号（通巻17号 1935年1月）までは縦18.5cmと横13cm

であったが、第3巻第2号より第7巻第5号（通巻69号 1939年6月）までが縦22cmと横15cmに変更されている。毎回の頁数はおおむね15、6頁であり、第5巻第5号（1937年5月）より7、8頁に縮小されている。「本号は又ガタ落ちの減頁ですが、雑誌のレーゾン・デートルは、決して其の頁数の厖大なる点にあるのではなくて、その中に何か少しでも示唆する所がある点にある」<sup>9)</sup>として頁数の減少によっても『佛陀』誌が雑誌としての生命に何等影響がないことを強調している。

雑誌出版を支えた財源は、出版収入と浅野の個人負担によって賄われたが、1933年（第1号～第4号）の決算を見ると、収入50円30銭に対して支出が110円12銭と報告されているように、完全な赤字経営であった。スポンサーなしの個人雑誌であることより、経営面での困難は避けることができず、出版の雑務も含めてその大半が浅野個人の負担であった。このために出版の財政的な支援を願って維持会員を募集することとし、度々、『佛陀』誌の編輯後記でその呼びかけを行っている。それでも出版経営は好転せず1935年10月から一時金10円の終身読者制を創始して誌友に援助を訴えている。この呼びかけに対して常光浩然、佐藤義詮、道端良秀、藤原猶雪、矢吹慶輝、真涙涙骨等が終身読者として名を連ね援助を行った。また、浅野の母校でもある日本大学の学生募集の広告も多く掲載されており、その広告料は不明であるが少しは本誌出版事業を支えたと考えられる。この他の広告として大東出版社（東京芝公園7-10）や近藤病院（東京市四谷区北伊賀町2）なども散見できる。

創刊号から第2巻第1号までには、表紙左上に「本誌の売上一部に就き一銭宛を欠食児童の救護費に充てます」と記し、第2巻第2号より最終頁に「本誌の収益は之を社会救護に充てます」に変更しているが、佛陀社としての救護活動を確認することはできない。

編輯発行兼印刷人は浅野研眞の名前を掲

げ、発行所を浅野の自宅である東京市渋谷区穂田1-1の佛陀社としている。第2巻第1号（1934年1月）より、自宅転居に伴い発行所の住所を東京市外吉祥寺337に変更した。

つづいて本誌創刊号について若干の検討を加えておこう。本号での巻頭論文は、浅野の「大乘佛教と社会实践」と題する論稿である。創刊号にはこの1本しか掲載されていないが、このタイトルこそが浅野が雑誌『佛陀』を発刊する主要なテーマであった。同号の編輯後記に「これは（『佛陀』 引用者補記）主として大乘佛教の社会理論及び実践に関する研究を企図するもの」であり「この方面の研究こそ現代社会不安に処する大乘佛教徒の重大な使命であらねばならぬ」<sup>10)</sup>と記している。これは經典の解釈や論釈を展開する伝統的的教学研究の立場ではなく、あくまでも社会の実相との関係において大乘仏教の歴史性と現実性を問い、ここでの有用性を明らかにして現代の社会不安に対処しようとする所謂「社会仏教」とも言えるものを目指していた。机上論としての仏教ではなく、時代と現代における社会实践としての仏教を模索し続ける浅野の言動は、必ずしも既成の仏教界の支持を得たとは言いがたいものの、一部の青年仏教徒から強い信頼を得ていたことも事実である。

浅野が「大乘佛教の社会实践」として先ず注目したのが社会事業分野における仏教者の社会实践であった。それは、大乘仏教經典に説かれる社会实践思想とこれに基づく具体的実践（＝社会政策的、社会事業実践）を歴史的に考察することにより、大乘仏教の社会实践性の高さを証明しようとした視点から論述されている。本稿では、主として大乘仏教の經典である法華経、勝鬘経、無量壽経などから社会救護に関する教えを抽出して、これに基づくインド、中国、日本の高僧の社会救護活動を紹介しながら大乘仏教の社会实践の歴史的事実を究明している。結語として「要するに、吾々の奉ずる大乘佛教は、その高さ社

会的実践性の故にこそ、今日に至るまでの存在を持続し来つたのだ。即ちそこには、存在の理由があり、必要性があつたからだ」<sup>11)</sup>と指摘して、その歴史的存在意義を明らかにした。つづけて「然るに現在はどうか？若し、それ寺院なり佛教なりが、全体社会の呪はしき重荷であるとしたらどうか？それこそ深重に考慮すべきことではないのか？全く、絶後に頭を回ぐらして、この現代社会不安に対して、大乘佛教的精神は如何なる実践に出べきか？如何なる社会案を持つべきか？凡ては佛祖の行履に倣ふことである。その時々社会不安に処した佛祖の行履こそが、現代に生かしめられねばならぬ」<sup>12)</sup>とまとめている。すなわち、大乘仏教の精神と歴史上の仏教者の救護活動に学びながら現代社会におけるその「社会案」を提示しようとする試みが『佛陀』誌発刊の意図であった。

雑誌『佛陀』が発刊されたこの時期の日本は、準戦時体制下にあつて国体の有り様が激変し、その後の戦時体制下への途を突き進む時期であつたことは指摘するまでもない。この状況下で仏教界すなわち仏教教団や個々の仏教者の立場が歴史的・社会的に厳しく問われる事態に直面していた。護教的批判者の立場から現状の仏教・仏教教団に対する批判的見解を持った浅野は、上述の状況に対して如何なる思想、態度、実践を展開したであろうか。それは、『佛陀』誌の毎号の論稿のみならず編輯後記に記されたその時々彼の行動を合せて総合的に分析することによって明らかになるであろう。

### Ⅲ 雑誌『佛陀』に見る論稿と行動

#### (1) 仏教（宗教）に関する論稿

浅野は、彼の学問的ベースである社会学については勿論のこと仏教学についても經典解読をかなり広く行い、その知識も豊富に持ち合わせていたようである。それは、彼が『日本佛教社会事業史』（凡人社1934年）を出版

した際の『日本佛教社会事業史』出版記念の夕べ」の集いの席上で、藤原猶雪（大正・昭和期を代表する仏教学者・東洋大学教授、戦後同大学学長）が祝辞のなかで浅野を評して仏教学に造詣が深く、加えて社会学を専攻した「佛教学、社会学両者に通じた得難き人物」<sup>13)</sup>と発言していることから理解できよう。祝辞という性格上、過大評価はあるものの『佛陀』誌上の論稿を見るだけでも多くの仏教經典や関係資料に当たっている形跡を見ることがきる。浅野の仏教研究の手法は、初期の段階では社会学者らしく仏教思想（經典に説かれた教え）の歴史的・社会的な意味とここから発露される社会实践の実相を解明することに重点がおかれていた。前掲の「大乘佛教と社会实践」、「佛教の時代性」（第2巻第1号）、「佛教の地域性」（第2巻第2号）などの論稿は、彼の仏教認識を最もよく物語るものである。時代性とは大乘仏教の歴史的現代を指し、この現代における大乘仏教の存在の意義を闡明にすることこそ『佛陀』誌の使命であるとした。また、地域性とは、仏教の発展がそれぞれの地域により独自の形態を持って展開しているとして、インドではインドの地域性に基く仏教が、日本では聖徳太子が「大乘相應地」と称した日本において「佛教の日本化」がなされ、「眞に民衆の宗教心を養成」し来たっており「宗教としての佛教が我が日本を以て最大一とする」<sup>14)</sup>とした。

以上のように浅野は大乘仏教の実践性を、単なる伝統教学的な經典解釈にとどまるのではなく、これを現代という時代と日本という地域において解明しようとするものであった。したがって、『佛陀』誌上の彼の論稿は、伝統的な宗学者の經典解釈とは全く異なる視点から、すなわち、大乘仏教經典の現代的・現実的解釈を試みるものであり、この視点から既成仏教乃至は教団の後進性や閉鎖性を鋭く批判する立場に立ち、時として、感情的ともとれる激しさを持ってそれへの攻撃をなしている。

「ルンペン親鸞」（第1巻第3号）では、浄土真宗の開祖・親鸞を取上げ、タイトルのように「ルンペン」としての親鸞像の中でその護国思想、現世利益論、布施論などを論じている。親鸞について1本の纏まった論稿として執筆したのはこれのみである。本稿では偶像化されがちな親鸞を「ルンペン」として現実生活態に即して把握しようと試みている。このような手法なり視点は、浅野自身の貧窮な生活体験と重なり合わせて親鸞を捉え直すことと、当時の親鸞研究の思想的方向があったようである<sup>15)</sup>。親鸞を「聖人」より「ルンペン」にまで下降させることによって、「宗教的ルンペンとして」の「平和な生活」を確保した親鸞像を描き出している。この小論における親鸞像は、どのようなものであったのだろうか。ここでは、親鸞のいわゆる護国思想を巡っての浅野の認識について検討を加えておこう<sup>16)</sup>。

浅野は、親鸞84歳の晩年、即ち1256（建長8）年7月9日に関東門徒の性信坊に宛てた消息の中で「朝家の御ため、国民のために、念仏をもふしあわせたまひそふらはゞ、めでとふそふろふべし」（『親鸞聖人御消息集』広本）との一文を取上げて「完全に政権への随順の姿に於ける念佛像が現れてゐる」や「現実的政権への妥協の一形式」<sup>17)</sup>として、護国のための念仏と理解した。しかし、親鸞の思想が初めから護国思想に彩られていたものでないことは浅野自身も認識しており、旧仏教の動向や承元の法難＝専修念仏停止に対して親鸞が「主上臣下、法に背き義に違し、忿をなし怨を結ぶ」（『教行信証』化身土・末）として痛烈に時の国家権力を批判していることを指摘している。それが親鸞晩年の護国思想、すなわち「政権に随順した」念仏への変質を「一種の人生的妥協」と断言し切っている。すなわち浅野は、人間親鸞が歴史に翻弄されながらその思想的変質を世俗的な生活の中での「人生的妥協」としての念仏へと変じたと捉えた。それは宗教者としての親鸞の

内面性と自律性を否定する解釈であり、この後の浅野の思想的変質を暗示しているように思える。浅野の護国思想肯定の見解は、明治以来の、したがって近代天皇制国家に従属する戦前の親鸞研究の伝統的認識であったかもしれない。浅野のこうした親鸞理解は、彼のその後の生き方や、それが意識的であれ無意識的であれ、とりわけ、15年戦争下において真宗教団が教団挙げて戦争協力体制を推進することとはからずとも同一歩調をとることとなり、否、これの積極的役割を主導する立場に立ち、皮肉にも既成教団の批判者が戦時教学推進の一翼を担うことにさえなったのである。

浅野を積極的に評価する点については前述したが、それは『佛陀』誌発刊初期の段階までの評価として妥当ではあるが、『佛陀』誌の全巻を通観していくと、その後は明らかに思想の変質を読み取ることができる。例えば「皇道佛教について」（第5巻第4号）と題する小論においては、聖徳太子を「我が大和魂に立脚して、惟神の大道をば、儒佛二教なる肥料の吸収によって、愈々育成せしめられた一大綜合文化建設の大恩人」として捉え、また太子の十七条憲法についても「その底流をなすものこそは惟神の大道である」<sup>18)</sup>との解釈をなしている。また、平安仏教の伝教（最澄）や弘法（空海）、さらに鎌倉仏教の栄西、日蓮、親鸞などをとりあげて「凡て、かうした敬神尊皇の思想は、深く深く日本大乘佛教の中心をなしてあるものである」<sup>19)</sup>として仏教の神性を強調した。国家神道に支えられた近代天皇制国家と、大乘仏教の関係構図が、「底流」・「中心」に「敬神尊皇の思想」をもった大乘仏教であるとする論調は、ここに至って体制ベッタリの大乗仏教論に変貌する。このことは、この延長線上において実行された満州事変を是認する立場<sup>20)</sup>をとることとなる。そして、大陸侵略のための仏教有益論を主張する諸論稿を次々と『佛陀』誌上に発表している。その主だったもののタイトルを掲

げると、「大亜建設と宗教工作」（第6巻第4号）、「移植民政策と宗教工作」（第6巻第6号）、「『佛物』思想を高揚せよ」（第6巻第7号）、「東亜政策と宗教問題」（第6巻第10号）、「東亜政策と宗教問題（下）」（第6巻第11号）、「長期戦下の求道」（第6巻第12号）、「東亜共同体と宗教」（第7巻第1号）、「新東亜建設と宗教」（第7巻第3号）などであり、1938年以降の『佛陀』誌上の浅野の論稿は戦争肯定論のオンパレードであった。

これらの内容について見ておくと「◇支那事変を契機として、大アジア建設の聖業が、ひしひしと進みつゝあるは嬉しい。◇ところで其の基礎的文化工作の方面に於て各宗教が、（中略）文化工作、宣撫工作に精進せんとしつつある現状は、まことによろしい」としながら、宗教工作について回教や天主教に比して仏教が不振であることを指摘した上で「明治維新の廢佛毀釈に洗礼されて、却て生氣を取り戻した日本佛教は、今こそ、この昭和維新の聖なる時代に際会して、旧陋を投げ棄て去つて、生新なる更生躍進へのスタートを切るべきだ」<sup>21)</sup>と、大陸侵略の一翼を担う宗教工作への仏教の役割を強く訴えた。

また、国内の戦時体制構築の強化に伴って次々に発動される戦時関係諸制度に対して浅野のとった態度もこれを是認し、これへの仏教の役割を説く主張を展開した。例えば「『佛物』思想を高揚せよ—貯蓄運動の宗教的基調—」（『佛陀』第6巻第7号）と題する小稿において浅野は、1938年、戦費調達として年間目標85億円を掲げ政府の音頭によって実施された国民貯蓄奨励運動について「◇たゞ無暗に、資源を大切にせよ、余裕がなくても貯金せよ、と云ふだけでは、必ずしも有終の美香は得られないかもしれないだろう。◇しかし、そこに宗教的意義を認め、「佛物」思想を導入するに於ては、それこそ欣喜して、その実践に精進せざるを得なくなるであろう」<sup>22)</sup>とした。しかしながら、「佛物」の仏教的意味は、世俗的な節約や貯蓄を意味する思想では

なく、仏教的な実践思想としての性質を有するものであった<sup>23)</sup>。浅野の「佛物」思想の理解は、貯蓄運動、しかも戦争を支える財源の国民からの捻出のための「貯蓄」＝世俗的営為と「佛物」思想が同レベルのものとして把握された。そして、「◇即ち今次の貯蓄運動に於て、我が佛教徒は、その独自の経済観に立つて、一段と、貯蓄奉公の至誠をぬきんずべきであろう<sup>24)</sup>とまで言い切つて、「佛物」の国家政策への積極的役割と意味づけを行った。また、貯蓄運動の具体的実践方法についても論及した。神奈川県鎌倉郡中和田村信用販売購買利用組合の例を紹介しながら、「而も此の組合は、貯蓄思想の根源を信仰に置き、家産一萬円の造出を目標として（中略）各組合員は、毎朝仏壇に礼拝しその度毎に一錢以上を靈前に供へる気持ちで、佛壇に備へてある貯金箱に入れることにしてゐるのは、先祖崇拜の実践の間に間に、知らず識らずの内に貯金ができると云ふもの、これ正に吾人の所謂大乘貯金の名称に値するものであろう<sup>25)</sup>として、国民の宗教的慣習をも貯蓄運動に関連づけてそれへの協力を喚起した。

浅野の仏教（宗教）に関する思想を検討してきたが、その論旨は社会全体が戦時色を濃くして行くに従つて、浅野の立場も国家主義的な仏教（宗教）観に変じていき、最終的には戦時体制への仏教（宗教）の積極的意義を主張するものになっていった。これこそ浅野が親鸞に求めた「人生的妥協」としての変質なのであろうか。それは、最早、浅野がかつて自己弁解的に告白した「生活のための雑文執筆」という範囲を超えるものであり、昔時のプロレタリア教育運動に関係した時期のマルクス主義者としての面影は全く消え失せ、無批判的な時代迎合主義とも思える論調に大きく変貌していった。この思想的な変質の内面的・外在的な理由を、今後、改めて問い直すことが浅野の人物像の再構築なると考えるが、この点の検討は後日に譲りたい。但し、一点のみ指摘できることは、仏教界全体が戦

時下の翼賛体制に積極的に加担する姿勢を示したこと、浅野の歩んだ途が期せずして同一線上にあること、否、この翼賛体制迎合を独自の仏教論により先導的に推進しようとしたことは事実として確認しなければならない。仏教革新のために既成仏教・教団を批判し続けた浅野は、戦時下においては戦争協力を訴える立場に変質した。かつて浅野の同志であり、1932年に仏教の社会科学研究を目的に仏教法政経済研究所を創設した友松円諦も平時においては「兵戈無用」を説き、戦時下においては「破邪の剣をとれ」、「悪人を折伏せよ」、「菩薩の利剣をとって起て」などと言ひ、戦争への協力を説いている。この思想的変質を転向と見るべきであるとの見解があるが<sup>26)</sup>、浅野にしても友松にしても国家による権力的統制の結果としての変質とは言えず、むしろ自ら進んで体制に迎合していった転向以前の姿勢であったと指摘せざるをえない。

## (2) 仏教復興批判、新興類似宗教批判

『佛陀』誌上での浅野の論稿として度々発表されているものが、仏教復興や新興類似宗教（浅野は新興類似宗教を邪教と捉えているが、本稿では史料表現を除いて新興類似宗教とする）批判に関するものである。前者について言えば、昭和初頭の反宗教運動後、マスメディアで積極的に仏教が取上げられた。この旗手となったのが友松円諦と高神覚昇である。彼らのラジオ放送や『法句経講義』（友松）や『般若心経講義』（高神）などの出版物は、短期間のうちに爆発的な売れ行きを示し、仏教ブームをかもし出した。このブームの背景には、満州事変以降の日本社会のファシズムの進行により、国民の間で精神的不安が拡大した事情があった。このもつで、既成の仏教とは別に新たに生長の家（谷口雅春）やひとのみち教団（御木徳近）などの新興宗教が次々と誕生し、宗教ブームが世の中を席卷した。

浅野の仏教復興批判や類似宗教批判は、如



上の状況に対する思想と行動として現れている。仏教復興・仏教興隆とは、「即ち大衆の佛教的関心の拡大強化の後にのみ到着するものであるかも知れない。即ちそれは、かくして佛教的関心から、佛教的修道へと転入するものであるかも知れない<sup>27)</sup>」として、仏教への関心拡大のレベルから修道のレベルに到達したときにそれが実現されると考えている。関心の拡大という量ではなく、この中より「證悟發得の契機と信受<sup>28)</sup>」される質の問題こそが問われねばならないと指摘する。すなわち、マスメディアで持てはやされ、否、それによって創出された仏教ブームに対して冷ややかな眼差しでこの現象を観察したのが浅野であった。

社会不安は、他方において幾多の新興宗教を誕生せしめた。浅野はこれらに対して「その跋扈跳梁しつゝあるもの、殆ど凡ては、迷信邪教、インチキ宗教のみにして、社会民衆を蠱毒しつゝある現状は、誠に慨嘆に堪えざるものあり」として「社会正義及び正法正信」に立脚して「斯る妖邪の魔軍を撃滅掃除せんことを期す」と宣言し、1935年末より新興類似宗教への批判を開始した。ここでの行動方針として、対外門では、(a) 社会経済上よりの邪教の徹底的批判撃滅、(b) 医療病理上よりの邪教の徹底的批判撃滅、(c) 宗教々義上よりの邪教の徹底的批判撃滅、(d) 宗教法制上よりの邪教の徹底的批判撃滅、(e) 治安維持上よりの邪教の徹底的批判撃滅、(f) 宗教教育上よりの邪教の徹底的批判撃滅とし、対内門として (a) 社会正義の確立、(b) 医療施設の改善、(c) 正法正法の護衛、などを掲げた<sup>29)</sup>。1935年11月に新興類似宗教に対しての戦いを宣言した浅野は、この直後に佛教社会学院主催で「邪教撃滅正法顕揚大座談会」を京橋・八重洲園にて37名の参加者のもと開催した。ここでの参加者の発言は、新興宗教の医療問題、貯金問題、現世利益問題などの欺瞞性を赤裸々に述べた。そして今回の「申合せ」として「一、現時簇生しつつある所

謂新興類似宗教なるものは、その殆んど凡ては、邪教迷信の要素多し、故に吾等は之が徹底的批判撃滅を期す。一、吾等は空漠たる佛教復興の空景気を去り、大乘佛教の現代的適応を期す<sup>30)</sup>とした。

新興類似宗教を「邪教」と捉える基準は、何であったであろうか。浅野は、「邪教と正教」（『佛陀』第5巻第2号）と題する論稿において、「邪教」の基準として①反国体的、②反道徳的、③反科学的、④反医薬的の4点を指摘している。ならば正教としての宗教は、どのようなものであるのか。「正しき宗教は、これらの「反」何々のでないばかりでなく、それを超越した「超」の世界を見出すこと<sup>31)</sup>」であるとした。

宗教的真理は超時代性や普遍性、そして現実性を有するものであり、時として世俗の在り様としての国体や道徳と対立する宗教的価値観を示す。それは時には反国体的、反道徳的な性質を示すこともありうる。歴史を概観しても時の権力と激しく対峙して、このために幾多の弾圧を受けてきたことはそれが証明するところである。しかして、新興類似宗教のうちのいくつかは、国家批判を展開し、国家権力の弾圧の対象になったことを捉えて「反国体的・反道徳的」な宗教＝「邪教」と早計に認識することは少々無理が存在するのではなかろうか。鎌倉新仏教と呼ばれ、現代においては既成仏教教団となっている大乘仏教は、その成立時において旧仏教勢力より「反国体的・反道徳的」との批判をうけ、社会を惑乱するものとして当時の権力によって弾圧されたことを顧みれば浅野が指摘する「邪教」基準をすべて是認することはできない。

新興類似宗教の発生原因について浅野は、社会経済的な背景と宗教自体の内部的理由の二つの方面から捉えた。前者については、特に新興類似宗教の医療問題を取上げて、国家の医療制度の不備＝医療の社会化・民衆化の未整備の結果が医療を必要とする民衆をして新興類似宗教の祈祷をはじめとする迷信的な

行為に向かわせてしまっているとし、後者については、思想不安、既成宗教の不振、宗教批判力の欠如などが原因してそれを誕生させることになったとした。そしてこれの対策として、①社会正義の確立と社会経済統制の樹立、②医療施設の改善、③正信正法の擁護、④治安維持上の取締りなどの必要性を主張している<sup>32)</sup>。

浅野の新興類似宗教への批判は、『佛陀』誌をはじめとする論稿の発表だけではなく、彼の具体的な行動としても表現された。1936年6月には、「邪教撃滅連盟」を立ち上げ、各地でこのための講演活動を展開した。彼の行動は、新興類似宗教団体から警戒されていたようであり、同上年、広島市での講演会では、「ひとのみち教団」の関係者数百人が会場にて講演妨害の行為におよび、帰京後も尾行されたので警察によって身辺保護を受けることになったとの記録<sup>33)</sup>が存在する。すなわち、新興類似宗教批判の急先鋒として浅野は位置していた。「邪教撃滅連盟」は、1936年10月に同連盟の当初の目的が「略々達成」されたとして解散を宣言し、次の課題として「邪教団の潰滅によつて抛りどころを失つた無辜の大衆に、真正なる精神的安住所を与へ」、「新たな顕正中心の振興運動を開始せん」として「佛教振興会」を創立した<sup>34)</sup>。

「略々達成」されたとする撃滅運動は、直接的には浅野らの運動の成果によってなされたものではなく、むしろ国家の強権によって成し遂げられた。1935年に大本教が翌年にはひとのみち教団が弾圧を受け、これらの教団は壊滅的な打撃を被った。国家権力による新興類似宗教の弾圧について浅野はこれを評価する態度を持したが、これが単なる新興類似宗教に対する出来事と言えるのであろうか。すなわち、ファシズムの進行と併せて状況の分析が必要である。新興類似宗教への弾圧は、同時に戦時体制への宗教団体の再編成に他ならない。当然の如く浅野が批判を展開した時期は、確実に戦時色が強くなる政治的・

社会的状況であった。これと連動して国家の宗教対策を捉えれば、明らかに戦時に向けての管理と統制が推し進められている位のことは誰の眼にも十二分に認識できたであろう。しかし、浅野は、これらの点については一切言及していない。それは、彼にとっては論及する必要がなかったのである。なぜなら、1930年以來の日本による満州事変、その後展開される大陸侵略を是認する態度をとり続け「大アジア建設の聖業」と位置づけたことでも明らかのように、この体制に協力的態度をとっていたからである。さらに指摘すれば、前章で指摘した戦争に加担する、しかも大乘仏教の積極的戦争協力をこそ浅野は構想したのであり、そのための宗教統制は当然のこととして認識されていた。

### (3) 仏教社会事業に関する論稿と行動

『佛陀』誌上には、仏教社会事業に関する論稿と行動や宗教教育についての論稿を見ることができる。周知の如く浅野の仏教社会事業に関する代表的な研究は、『日本佛教社会事業史』(凡人社 1943年)である。同著については、本誌第3巻第2号と第4号で『日本佛教社会事業史』合評として関係者からの読後感が紹介されている。浅野の仏教社会事業の研究は、現代社会での仏教の存在意義を具体的に表現するものとして、また宗教教育は正しい宗教を見極める能力を涵養するためのもので重視した。それは、浅野にとって一本の筋道としての構図である。すなわち、仏教復権=現代化のための大乘仏教の社会安が仏教社会事業の振興であり、真の宗教への覚醒のための能力養成が宗教教育にあったのである。本章では仏教社会事業について検討する。

浅野と社会事業の関係は、昭和初頭、牧賢一らを中心に創設された「三火会」に会員として参加していることや<sup>35)</sup>、論文として「日本社会事業の父としての聖徳太子」(『現代佛教』1928年7月・8月)、「佛教的救済制度と

しての無尽」（佛教社会学院パンフレット1930年）、「フランスの社会事業学校」（『社会福利』1930年5月）、「国際セツルメント運動とその思想」（『社会事業』1930年6月）、「ドイツ社会事業の近況」（『社会事業』1930年7月）などを発表していることにより、昭和期に入ってからである。昭和初頭より「三火会」を通じて若き社会事業関係者と交わりながら、1928年のフランス留学によって得たヨーロッパ各国の社会事業事情の見聞によってそれへの関心を高めていった推測できる。

さて『佛陀』誌上に発表された仏教社会事業に関する論稿についての検討に移る。前述した通り、『佛陀』誌発刊の使命は大乗仏教精神に基づく現代社会における具体的な実践案を提示することを目的としている。浅野は、これを明らかにするために仏教者の社会実践に注目し、度々、「佛祖の行履に倣え」と強く主張している。すなわち、ここに見出した事実が仏教者の社会救済・慈善事業であった。前章の指摘と重複するかもしれないが、浅野が早くから注目していたのが、日本社会事業の父としての聖徳太子であり、太子の創建と伝えられる四天王寺での社会救護事業を重視した。太子の、この事業を「一個の偉大なソーシャル・セツルメント」であるとして「かうしたセツルメントこそは、現代に於て充分に有用なものであらねばならぬ」<sup>36)</sup>とし、つづけて伝教大師、弘法太子、栄西禅師、道元禅師、鉄眼禅師などの日本仏教の高僧の社会実践例を紹介している。そして結論的に「佛祖の行履に倣へ」とし「この現代社会不安に対して、大乗佛教的精神は如何なる実践に出づべきか？如何なる社会案を持つべきか？凡ては佛祖の行履に倣ふことである。その時々社会不安に処した佛祖の行履こそが、現代に生かされねばならぬ」<sup>37)</sup>と指摘した。

まず、浅野の仏教的社会実践（仏教的社会救済・慈善事業）の理解は、1つに大乗仏教經典の中から特に社会実践に関する教えを抽出し、この教えに基づき展開された仏教者の社

会実践を歴史的に抽出すること、2つにここに導き出された社会実践を現代化することにあつたと考えられる。聖徳太子などの高僧の業績としての社会実践の究極を浅野は「寺院のセツルメント化」に求めた。本誌の「利用されぬ農村寺院」（第2巻第12号）と題する小論において「寺院の本来の使命は、どうした所で、公共的・公益的なものでなければならぬ。佛寺の歴史的背景を見た所で、この事はどうしても否定されないことだ。それが、何時の間にやら、貴族や豪族の別荘と化し、また今日では住職を家長とする所謂「寺族」の私宅と化してしまつたのである」<sup>38)</sup>として仏教寺院の「寺族」による「私物化」を批判した。つづけて「吾々は今日既に、特に真宗や浄土宗などで、盛んに農繁期托児所としての寺院の広汎なる利用を見て喜んでゐるのである。また大阪の佐伯氏の寺など立派なセツルメントのプロセスを辿りつゝあるのである」、「都市には幾多の文化センターが存在してゐるのであるが、農村にはそれが無い。（中略）して見れば、農村寺院の農村セツルメント化こそは、まことに重大なる価値を持つものであらねばならぬ」<sup>39)</sup>と指摘して「農村寺院のセツルメント化」を訴えている。

浅野の仏教寺院の現代化の主要な主張が社会救護実践への着手であり、それは1934年4月に発表された「佛陀社三大期誓」にも明瞭に示している。同期誓第2項に「佛祖の行履を現代に生かし、広汎なる社会救護を果遂せんことを期す」<sup>40)</sup>とし、社会救護実践の場が「寺院のセツルメント化」による仏教寺院の理想的姿であつた。この思考は、次に自身の「佛陀社セツルメント」創設へと発展する。すなわち、1934年6月、仏誕2500年を記念して「佛陀社セツルメント」創設を発表した。「活力と財力に乏しい吾人は、今や僅かに其の一步をしか踏み出し得ざるものであるが、しかし大乗佛教に立脚し、所謂トイエンビー的精神を其處に充分に開顕せしめて、やがて適切なる総合的施設たらしめんことを念願す

る」としてセツルメント創設を宣言した。そして、当面の事業を①仏陀社青年部、②仏陀社図書部、③社会事業研究部、④児童保護部、⑤社会教育部などと定めた<sup>41)</sup>。その後、このセツルメントが具体的にどのような活動を展開したかは『佛陀』誌上には何らの記録もなく、その実態は不明である。しかし、浅野が自らの主張を机上の空論に終わらせることなく、これを具体的実践として模索していたことを表す証左と理解すべきである。

浅野の行動面で注目すべきことが1935年4月に創設した佛教社会学院である。先の佛陀社セツルメントについては、その実態が明らかでないが、この佛教社会学院については活動内容を少し明らかにすることができる。同学院の発願文に「現下の如く逼迫せる社会不安の真只中に於て、真に佛教の菩薩行を現代的に実践せんとするためには、如何なる具体的プランを以つて之に臨むべきか？此等の切実なる諸問題の解明によって、真に身を以つて佛教の本具的使命たる社会实践を遂行せんとする佛教徒（僧籍の有無を問はず）のために、茲に専門の学院を開設して、広く研修の便を与へ、以つて時代の先覚者としての有能真摯なる現代的佛教徒を養成し、佛教徒の社会活動を組織化し、宗門社会事業の体系化を図り、佛教の慧日を現代に光被せしめんと念願する次第である」<sup>42)</sup>として、同学院の創立を宣言した。そして、ここでの目的を「広く佛教徒、特に青年住職僧侶並に寺族の社会活動の組織化、宗門社会事業家の養成、及び新時代に適合する寺院経営に必要な学術を教授」<sup>43)</sup>することとし、入学年齢を学歴を問わず18歳以上の者とした。ここに浅野の仏教革新への想いが込められており、特に青年層に対する大きな期待があった。例えば同誌上に「若き女性に佛教を語る」<sup>44)</sup>と題した小論において若き婦人の佛教救済事業への進出に期待を込めた一文を发表或し、「現代青年に佛教を語る」<sup>45)</sup>では、「多角的な幾つもの文化的デメンションを持つたプリズムに作り

上げることこそが、私達青年に課せられた任務であります。故に私共は、これを『佛教の復興』といふよりも『佛教の改新』と呼びたい」として、仏教革新への青年の役割を強調した。こうした青年仏教徒に対する期待は、『現代佛教批判』（構成館書房 1936年）にも、その第二部として「佛教青年運動」に関連した小論を5本収めていることから推察できるように並々ならぬものがあつた<sup>46)</sup>。

さて、佛教社会学院の教育内容は、(A)基本講座として仏教社会学、仏教社会事業史、経済学、政治学、社会政策、社会事業概説、社会衛生、社会教育、労働問題、農村問題、婦人問題、児童問題など、(B)特殊講座として宗教制度、民衆娯楽、仏教美術、寺院経済、国防問題、海外布教、移民政策、司法保護、融和問題、社会保険、時事問題など、(C)課外講義、討論会、見学実習など、の科目を設定していた。開講時間が午後6時から同9時までの1日3時間の講義で期間が3ヶ月であることより、多様な科目を広く浅く教授することとなり、入学者に現代的・社会的課題についての知識を与えることを狙いとしていたと考えられる。第1期の講義は、1935年5月1日より開講されており、主たる開講科目と担当者は以下の通りである。『佛教的社会実践』（浅野研真）、「佛教と婦人問題」（清谷閑子）、「最近アメリカの宗教事情」（山内雄脩謙）、「最近ドイツの宗教事情」（榊原順次）、「社会調査」（古坂明詮）、「社会衛生」（諸岡存）、「労働問題」（赤星四七郎）、「佛教社会事業史」（浅野）、「児童保護」（高橋梵仙）、「佛教社会学」（浅野）、「農村問題」（馬場明男）、「司法保護事業」（近藤亮雅）、「佛教美術について」（岡本貫瑩）、「教団の研究」（久保田正文）、「佛教社会事業の展望」（長谷川良信）などであつた。

上記科目の講師陣は、浅野と親交のある人々で、多くが同学院の顧問や評議員に名を連ねていた。第1期修了者は、20名であつたが、第2期は11名に減少しており、第3期以

降は不明である。もともと同学院の設立には、当初より運営基盤の財政的・組織的面で無理があったことは指摘するまでも無く、浅野の想いだけが先行した事業であったと指摘せざるを得ない。このために第2期の講義科目と講師を見ても、講師の都合により科目名が選定されたり、あるいは期間が不規則になったりなど、当初の構想とはかけ離れたものとなっている<sup>47)</sup>。

青年仏教徒の社会活動や社会事業の担い手を期待して設立した佛教社会学院の事業も十分な成果を挙げることができないままに自然消滅的に終わっているが、同時に、『佛陀』誌上においても仏教社会事業に関する論稿も少なくなっている。その後の直接的な仏教社会事業についての論稿は、「聖徳太子と社会事業」(第5巻第3号)、「農村寺院と農繁期托児所」(第5巻第5号)、「農村寺院と医療施設」(第5巻第6号)などである。聖徳太子についての論稿は、これまでも浅野が度々論じたものの再掲に等しいものであり、農村寺院の社会事業についての論は特段新しいものではなく、その復興を訴えたものである。

以上のような浅野の青年仏教徒への社会活動や社会事業に関する期待は、これによって仏教復興・仏教革新を展開していく一つの方法として捉えられていた。すなわち、浅野にとっての仏教社会事業の復興は、社会事業がもたらす宗門あるいはそれぞれの仏教寺院の真の仏教革新を目指すものであった。したがって、彼は全国津々浦々に存在する仏教寺院の社会事業への着手を訴え続ける。とりわけ、昭和初頭から準戦時体制下の「国民的社会問題」は「農村問題」であると認識する浅野にとっては、農村寺院の復権こそが仏教復興・革新の姿でなければならなかったものであり、このための主張を展開したのである。晩年の浅野の仏教社会事業論は、これまでも述べてきたように彼の思想の変質＝国家主義への傾倒という点から考えると、戦時厚生事業の枠の中で捉えるべき検討課題であり、それ

の推進としての仏教社会事業論＝仏教の戦時体制下での有益論としての位置づけも必要となるであろう。

### むすびにかえて

浅野研眞の個人雑誌『佛陀』の論稿を中心に、浅野の晩年の仏教に関する思想と行動を検討してきた。晩年のそれが先行研究の評価と大きく異なっている点を少しく指摘できたと考える。浅野の前半期の思想と晩年のそれがどのような関係を持つのであろうか。そして、これらを全体として一本の線で再構築した時に、浅野の生涯を通じての思想の評価が下される。人間の思想は振幅の差こそあれ課題に直面しながら揺れ動きつつそれを行動化していく営みをなす。かつて、鶴見俊輔が転向研究に際して発言した言葉が脳裏に残っている。鶴見は「もともと、転向問題に直面しない思想というのは、子供の思想、親がかりの学生の思想なのであって、いわばタタミの上でする水泳にすぎない」と指摘し、また、「非転向の稜線に基準をおいて、そこから現代の諸思想を裁くことは、子供の思想によって大人の思想を裁くこっけいをあえてすることになりかねない」<sup>48)</sup>とも言っている。すなわち、浅野の戦時下における思想の変質は、確かに戦争推進の仏教の積極的役割を強調したものになっているが、それを一刀両断に斬って批判しても有益な研究とは言えない。「過去における転向例をたどりなおすことをとおして、過去における思想の不生産性の再検討がなされ(中略)、この方法が、現代日本において生産的思考への道を開く最も現実的な手段」<sup>49)</sup>と鶴見は指摘する。浅野の変質した晩年の思想は、生産的思考として何かをもたらすものであったのか。変質の真意は詳らかでないが、いち早く時流に便乗した姿に何も発見することはできない。

浅野研眞や仏教界をリードした多くの指導者たち、さらには仏教教団が戦時下に犯した

罪（＝思想の不生産性も含む）は戦後の研究において如何程究明されてきたであろうか。これを不問にして戦後の「戦争責任」は存在しえない。たとえ形式的になされたとしても思想の深化による行動化は生まれてこない。ここで仏教の戦争責任について触れることは避けるが、戦争協力に関する史料のひとつが『佛陀』誌であろう。今回、これの全貌が明らかになったことは、仏教者としての浅野個人の思想と行動を思考するのみならず、これを通じて仏教界の戦時下での諸相の一端をも理解することができ、その意義は大である。

今回、『佛陀』誌の論稿のすべての分野について分析することは筆者の能力を超えるものであり、したがって不十分な部分も多く残している。とりわけ、浅野が在野の社会学者であることを考えれば、宗教社会学についての論稿を分析できなかったことは少なからぬ課題を残した。浅野の代表的研究として『日本佛教社会事業史』（凡人社 1934年）とともに『佛教社会学研究』（凡人社 1935年）があることは周知のことであるが、後者の著書に見られるように浅野は仏教をはじめとする宗教社会学の確立に情熱をそそいだ。『佛陀』誌上でも多数の宗教社会学に関する論稿を発表しており、今後、社会学研究の立場から検討されることを望む。偶然にも『佛陀』誌上での彼の最後の論稿が『『神道社会学』について』と題する小論であったのも、浅野の研究生生活が社会学に始まり社会学に終わった一生であったことを示しているように思えてならない。

\* \* \* \* \*

本論文は、平成19年度久留米大学文学部の国内研修における研究成果の一部である。これまで本研究については、「浅野研眞研究」（『仏教生命観に基く人間科学の総合的研究』龍谷大学 2009年3月）や「浅野研眞—仏教社会主義者の社会事業と実践」（『人物よむ社会福祉の思想と理論』ミネルヴァ書房 2010年1月）などで発表した。

なお、今回、『佛陀』誌とその関係資料の蒐集については、故浅野文雄氏、並びに大谷大学図書館、龍谷大学図書館、京都大学図書館などでの協力を賜った。ここに記して感謝の意を表す。

#### 註

- 1) 浅野のプロレタリア教育運動との関係を論じた先行研究として、池田種夫『プロレタリア教育の足跡』（1971年 新緑出版）、柿沼肇「浅野文庫目録」（『教育運動史研究』9・10号 1967年・1968年）、岡本洋三「戦前教育労働運動史研究の問題点」（『教育労働運動の歴史』1970年）などがある。
- 2) 浅野研眞「佛教運動と社会運動～青年佛教徒へのアピール」（雑誌『佛教思想』1931年1月号）36頁。
- 3) 浅野が教育運動から足を遠ざけ「仏教社会学者・護教的仏教評論家」として歩み始めて行った経緯について、日本大学の後輩でもあり浅野と個人的な親交があった桜井庄太郎は、仏教復興運動との関係を指摘している。（桜井庄太郎「浅野研眞氏を悼む」『社会学徒』第13巻第9号 1939年）28頁。
- 4) 一向一揆に関する研究は、浅野が最も精力的に取り組んだテーマであり、既発表論文を編集して書物として出版を試みていたが実現することが出来なかった。因みにこれの遺稿原稿の構成は下記の通りである。第1部 一向一揆の基礎的研究 第1章 一向一揆を生んだ社会環境 第2章 「一向」及び「一揆」の基礎概念 第3章 一向一揆の基礎概念 第4章 農民戦争としての一向一揆 第5章 一向一揆の分類 第2部 一向一揆の史的展開 第1章 蓮如上人と一向一揆 第2章 実如上人と一向一揆 第3章 証如上人と一向一揆 第4章 顕如上人と一向一揆

- 付録 1年表 2文献 3系譜（峰島旭雄編『近代日本の思想と仏教』東京書籍1982年 336頁～7頁）。
- 5,7) 浅野研眞『社会現象としての宗教』大雄閣 1928年 152p～153p.（初出：「佛陀とマルクスの同一性」雑誌『佛教思想』1928年4月号）。
- 6) 浅野研眞『社会宗教としての佛教』大雄閣 1934年 18頁.（初出：「現代佛教界に与ふ」『読売新聞』1933年3月2日～4日）。
- 8) 「邪教と正教」（『佛陀』第5巻第2号 1912年2月）2頁.
- 9) 『佛陀』（第5巻第11号 1937年11月）7頁.
- 10～12) 「大乘佛教と社会实践」（『佛陀』第1巻第2号 1933年9月）2頁～11頁.
- 13) 「『日本佛教社会事業史』出版記念の夕べ」（『佛陀』第3巻第3号 1935年3月）10頁.
- 14) 「佛教の地域性」（『佛陀』第2巻第2号 1934年2月）4頁.
- 15) 本稿で浅野も指摘しているように、倉田百三の『出家とその弟子』や石丸梧平『人間親鸞』などについて「要するに、それらの作品は、天上界まで祭り上げられた「聖人」親鸞を、近代的な批判的精神によつて、あるがまゝの「人間」親鸞に、即ち地上にまでに引き降して、人間への再復権を行はんとするもの」とし、さらに、これを進めて「ルンペン」親鸞まで再下降させる試みであるとした（「ルンペン親鸞」『佛陀』第1巻第3号 1933年11月 2頁）。
- 16) 周知のように明治維新政府の廃仏毀釈政策により仏教はことごとく否定される中で仏教の国家的・社会的有用性を積極的に主張する仏教側の立場としてその「護国性」を前面に打ち出して仏教・仏教教団を維持存続させようとする動向が存在していた。この系譜は十五年戦争下において積極的に戦争に協力する態度となり、仏教教団自ら「戦時教学」を作り上げ、釈尊やそれぞれの教団の開祖の本来の教学を著しく歪曲化し、国家主義に迎合する仏教に変質せしめた。親鸞を宗祖と仰ぐ真宗教団においてもその例外ではなく、むしろ仏教界をリードする形で「戦時教学」を流布し、教団挙げての戦争協力体制を作り上げていった。この「戦時教学」の支柱のひとつが親鸞のいわゆる護国思想であった。
- 17) 「ルンペン親鸞」（『佛陀』第1巻第3号 1933年11月）2頁～8頁.
- 18, 19) 「皇道佛教について」（『佛陀』第5巻第4号 1937年4月）3頁～5頁.
- 20) 吉田久一は、浅野の『佛教社会学研究』（1935刊）について「満州事変の深まりの中で、他国家への侵略を否定し、仏教の国際性を説いている」（吉田久一『吉田久一著作集1 日本社会福祉思想史』川島書店 1989年 499頁）と指摘しているが、『佛陀』誌上の諸論稿を見る限りにおいては、『佛教社会学研究』刊行以降、浅野は国家主義の思想に変容し、日本軍の大陸侵略を是認する立場に変じている。
- 21) 「大亜建設と宗教工作」（『佛陀』第6巻第4号 1938年4月）2頁.
- 22, 24) 「“佛物”思想を高揚せよ—貯蓄運動の宗教的基調—」（『佛陀』第6巻第7号 1938年7月）3頁.
- 23) 仏物とは、三宝物の一つであり仏に専属する財物を指す。これには三種類があり、①仏を安置する殿堂・仏台及び諸種の仏具類、②仏に供養する飲食物、③施主が仏に献じる金銭田畑などを云うが（『真宗大辞典』第3巻）、この思想を特に強調したのが本願寺第8世の蓮如であり、浅野も本稿において蓮如の紙切れ一枚といえども仏物として拝受する態度を紹介している。

- 25) 「一家一萬圓の賽銭貯金一貯蓄報国と先祖供養」(『佛陀』第6巻第7号 1938年7月) 4頁～5頁.
- 26) 圭村諦成監修『日本仏教史Ⅲ 近世・近代篇』法蔵館 1967年 446頁.
- 27,28) 「眞の佛教復興」(『佛陀』第2巻第9号 1934年9月) 2頁～3頁.
- 29) 「『邪教撃滅戦』を宣す」(『佛陀』第3巻第11号 1935年11月) 2頁～3頁.
- 30) 「邪教撃滅正法顕揚大座談会の記」(『佛陀』第3巻第12号 1935年12月) 3頁～7頁.
- 31) 「邪教と正教」(『佛陀』第5巻第2号 1937年2月) 4頁～5頁.
- 32) 「邪教撃滅のために一発生原因と内容批判及び対策」(『佛陀』第4巻第1号 1936年1月) 3頁～9頁.
- 33) 「邪教撃滅連盟の戦闘報告」(『佛陀』第4巻第12号 1936年12月) 11頁～12頁.
- 34) 「“撃聯” 解散宣言」佛教振興会創立趣意書」(『佛陀』第4巻第10号 1936年10月) 11頁～13頁.
- 35) 三火会について、同会のメンバーとして参加していた松島正儀は、牧賢一、磯村英一、鉄谷長太郎、村松義郎などの唯物弁証法の立場、福山政一、原新太郎、岸田到、早崎八洲、中島千枝などの社会連帯思想・人道主義の立場、浅野研眞、松島正儀、木立義道、谷川貞夫、松本征二などの社会改良主義の立場にある若き社会事業者たちが毎回激論を交わした(重田信一・吉田久一編『社会福祉の歩みと牧賢一』全国社会福祉協議会 1977年 130頁～133頁)し、浅野の立場を唯物弁証法の立場ではなく、社会改良主義にあったと指摘している点は注目される。そして松島談によると「浅野が三火会中もっとも理論的整然としていた」(『吉田久一著作集1 日本社会福祉思想史』川島書店 1989年 498頁)と高く評価している.
- 36,37) 「大乘佛教と社会实践」(『佛陀』第1巻第1号) 2頁～11頁.
- 38,39) 「利用されぬ農村寺院」(『佛陀』第2巻第12号 1934年12月) 3頁～5頁.
- 40) 「佛陀社三大期誓」(『佛陀』第2巻第4号 1934年4月) 12頁.
- 41) 「佛陀社セツルメントの創設～佛誕2500年を記念して～」(『佛陀』第2巻第6号 1934年6月) 12頁.
- 42, 43) 「佛教社会学院の開設～敢て趣旨を江湖に訴ふ～」(『佛陀』第3巻第2号 1935年2月) 2頁～3頁.
- 44) 「若き女性に佛教を語る」(『佛陀』第3巻第5号 1935年5月) 5頁.
- 45) 「現代青年に佛教を語る」(『佛陀』第3巻第6号 1935年6月) 2頁～6頁.
- 46) 浅野研眞著『現代佛教批判』の第二部に収められた論稿は以下のようなものである。「汎太平洋佛青大会を迎えて」(初出『若き時代』1934年9月), 「佛青大会は何をしたか」(初出『帝都日日新聞』1934年7月22・25・26連載), 「汎太平洋佛青大会の総評」(初出『セルバン』1934年9月), 「農村寺院と佛青運動」(初出『全日本佛教青年会聯盟ニュース』1936年11月), 「佛教青年運動の展望」(初出『教学新聞』1936年1月).
- 47) 佛教社会学院についての記録は、「佛教社会学院の開設」(『佛陀』第3巻第2号), 「佛教社会学院小誌」(『佛陀』第4巻第3号) などがある.
- 48,49) 鶴見俊輔『転向研究』筑摩書房 1976年 7頁～8頁.



## 雑誌『佛陀』総目次

## 第1巻第1号（1933年9月）

大乘佛教と社会实践	浅野研眞	2頁～11頁
関西遊記	浅野研眞	12頁～13頁
師友通信 編輯後記		14頁～16頁

## 第1巻第2号（1933年10月）

教団のあるべきやう	浅野研眞	2頁～7頁
テロリズム断想	牧野内寛清	8頁
一人一描	西玲子	9頁
世直し一ツとせ節（資料）	佐田介石	10頁
熱海だより	内田義眞	11頁
師友通信 編輯後記		14頁～16頁

## 第1巻第3号（1933年11月）

ルンペン親鸞	浅野研眞	2頁～8頁
善悪と云うこと	南塚昭純	9頁～10頁
お釈迦様に恋した女流作家	木曾みどり	11頁～12頁
誌友通信 編輯後記		14頁～16頁

## 第1巻第4号（1933年12月）

亜細亜（一幕）	浅野研眞	2頁～9頁
佛教落書小考	上坂倉次	10頁
一枚の木の葉	赤松月船	11頁
教界彙報 誌友通信 編輯後記		14頁～16頁

## 第2巻第1号（1934年1月）

佛教の時代性	浅野研眞	2頁～3頁
佛教の起源その他	タールハイマー	4頁 13頁
巴里だより	松尾邦之助	15頁
誌友通信 編輯後記		15頁～16頁

## 第2巻第2号（1934年2月）

佛教の地域性	浅野研眞	2頁～4頁
「植字工」	富永仲基	
	奥山道明	5頁～6頁
将来の無宗教	吉永千果	7頁～8頁
モスクワだより	安部よしゑ	9頁
慶念坊と捨子（子供の頁）	岡みつを	10頁～11頁
誌友通信 編輯後記		12頁～16頁

## 第2巻第3号（1934年3月）

科学の彼方に宗教	浅野研眞	2頁～3頁
草堂漫想	綿貫六助	4頁～5頁
銀座の柳	近藤信夫	6頁～7頁
巴里だより	松尾邦之助	8頁
小著『佐田介石』に対しての諸家よりの芳書	浅野生	9頁～11頁
誌友通信 編輯後記		12頁～16頁

## 第2巻第4号（1934年4月）

花祭り小感	浅野研眞	2頁～3頁
融和事業	太田覚眠	4頁～5頁
『佛教社会学』を讀みて	友松円諦	6頁
一日一善（コント）	河地東夫	7頁～9頁
おまつり（童話）	楨本楠郎	10頁～13頁
誌友通信 編輯後記		14頁～16頁

## 第2巻第5号（1934年5月）

佛教の王道論	浅野研眞	2頁～7頁
母の死に直面して	遠藤順栄	8頁
逝く者の心理	松山五郎	9頁～12頁
受入図書		13頁
誌友通信 編輯後記		14頁～16頁

**第2巻第6号(1934年6月)**

求道夜話	浅野研眞	2頁~4頁
欧州人は親鸞をどう観る	松尾邦之助	5頁~8頁
青年佛教徒の使命	緑川光覚	9頁~12頁
新入図書		13頁
佛陀社セツルメントの創設		13頁
誌友通信 編輯後記		14頁~16頁

**第2巻第7号(1934年7月)**

病床断想	浅野研眞	2頁~4頁
巴里の思い出	昇須美子	5頁~7頁
「求道夜話」を讀みて	横川四郎	8頁~9頁
排酒運動の側から	安藤政吉	10頁~11頁
白隠禅師座禅和讃		12頁
誌友通信 編輯後記		13頁~16頁

**第2巻第8号(1934年8月)**

国府と稲田(親鸞聖蹟巡礼)	浅野研眞	2頁~5頁
母の随筆	伊福部敬子	6頁~7頁
昇曙夢氏より		8頁
不安パトロギー	高井直	9頁~11頁
自然礼讃	福井昭	12頁
駄句片々	無無子	13頁
誌友通信 編輯後記		14頁~16頁

**第2巻第9号(1934年9月)**

眞の佛教復興	浅野研眞	2頁~3頁
歎異抄の醍醐味	辻田長生	4頁
信州渋温泉の伝説	橋本正恵	5頁
巴里雜詠	森永龍	6頁
北支那だより	内田義眞	7頁~8頁
『社会宗教としての佛教』合評1		9頁~12頁

清貧主義是非	高井直	13頁
誌友通信 編輯後記		14頁~16頁

**第2巻第10号(1934年10月)**

遊行僧一遍	浅野研眞	2頁~6頁
宗門に叫ぶ	井上淳念	7頁~8頁
焼津だより	鈴木賢	9頁~10頁
『社会宗教としての佛教』合評2		11頁~12頁
巴里徒然草	無無子	13頁
誌友通信 編輯後記		14頁~16頁

**第2巻第11号(1934年11月)**

佛教復興批判	浅野研眞	2頁~5頁
療病と求道	無無子	6頁~8頁
『社会宗教としての佛教』合評3		9頁~12頁
受領図書		13頁
誌友通信 編輯後記		14頁~16頁

**第2巻第12号(1934年12月)**

利用されぬ農村寺院	浅野研眞	3頁~5頁
農村の佛教復興	北山正	6頁~7頁
普化宗と虚無僧	橋本正恵	8頁~10頁
八王子の一日	浅野研眞	11頁
受領図書		12頁
誌友通信 編輯後記		13頁~16頁

**第3巻第1号(1935年1月)**

佛教復興以後	浅野研眞	3頁~6頁
宗教復興批判の態度	高井眞	6頁~7頁
弱者の地位	伊福部敬子	8頁~10頁
佐田介石忌並びに遺品展覧会の記		11頁~12頁
誌友通信 編輯後記		13頁~16頁

**第3巻第2号（1935年2月）**

佛教社会学院の開設	
浅野研眞	2頁
佛教社会学院概要	3頁
『日本佛教社会事業史』合評	4頁～13頁
誌友通信 編輯雑記	

**第3巻第3号（1935年3月）**

佛教社会学から見た浄土	
浅野研眞	2頁～9頁
『日本佛教社会事業史』出版記念の夕べ	
志賀静丸	10頁～12頁
誌友通信 編輯雑記	13頁～16頁

**第3巻第4号（1935年4月）**

「霊の救ひ」と宗教	
本田喜代治	2頁～4頁
『日本佛教社会事業史』合評	5頁～12頁
誌友通信 編輯雑記	13頁～16頁

**第3巻第5号（1935年5月）**

若き女性に佛教を語る	
浅野研眞	2頁～5頁
佛教ユートピアの一考察	
浅野研眞	6頁～10頁
『歎異抄』を排撃す	
菅舜英	11頁～12頁
誌友通信 編輯雑記	13頁～16頁

**第3巻第6号（1935年6月）**

現代青年に佛教を語る	
浅野研眞	2頁～6頁
佛教的社会実践について	
浅野研眞	7頁～9頁
再び「歎異抄」を排撃す	
菅舜英	10頁
欣求浄土	奈良敬蔵 11頁
誌友通信 編輯雑記	12頁～16頁

**第3巻第7号（1935年7月）**

【本号特別記事】	
青年死刑囚の最後の手紙	3頁～14頁
誌友通信 編輯雑記	15頁～16頁

**第3巻第8号（1935年8月）**

【本号特別記事】	
青年死刑囚の最後の手紙（続）	3頁～12頁
「死刑囚の手紙」を読みて	
岡本實太郎	14頁
誌友通信 編輯雑記	14頁～16頁

**第3巻第9号（1935年9月）**

佛教と酒と階級問題	
浅野研眞	2頁～3頁
「青年死刑囚の最後の手紙」読後感	
菅舜英	4頁～9頁
誌友通信 編輯雑記	10頁～11頁
Starigo de Budaisma Sociologio Ken Assano	
菅舜英	1頁～4頁

**第3巻第10号（1935年10月）**

宗教と愛欲との接線	
浅野研眞	2頁～3頁
人種の問題と佛教	
貫伝松	4頁～6頁
『佛教社会学研究』合評	7頁～12頁
誌友通信 編輯雑記	13頁～16頁

**第3巻第11号（1935年11月）**

「邪教排撃戦」を宣す	
浅野研眞	2頁～3頁
宗教政策の基調 円谷弘	4頁～12頁
佛教社会学院彙報	14頁
編輯雑記	15頁～16頁

**第3巻第12号（1935年12月）**

邪教撃滅大座談会の記	3頁～7頁
邪教撃滅万歳	8頁～9頁
誌友通信	10頁

雑録 街路樹と中將軍姫 浅野研眞	11 頁	誌友通信 編輯雑記	7 頁～8 頁
新刊紹介	12 頁～16 頁		
<b>第4巻第1号 (1936年1月)</b>		<b>第4巻第6号 (1936年6月)</b>	
邪教撃滅のために 浅野研眞	3 頁～9 頁	佛教社会学の方法論 浅野研眞	2 頁～3 頁
感謝録 浅野研眞	10 頁～11 頁	参禅第一日の印象 福井昭	4 頁
自己批判のために 浅野研眞	12 頁～13 頁	『間引』追考 浅野研眞	5 頁～6 頁
誌友通信 編輯雑記	14 頁～16 頁	新刊紹介 誌友通信 編輯後記	7 頁～8 頁
<b>第4巻第2号 (1936年2月)</b>		<b>第4巻第7号 (1936年7月)</b>	
宗教界の動向を語る 浅野研眞	2 頁～6 頁	邪教撃滅聯盟宣言, 綱領, 規約	2 頁～3 頁
『佛教社会学研究』合評	7 頁～11 頁	『現代佛教批判』小序 浅野研眞	4 頁
新刊紹介 誌友通信 編輯雑記	12 頁～16 頁	『間引』報告 細谷則理	5 頁
		新刊広告 誌友通信 編輯雑記	7 頁～8 頁
<b>第4巻第3号 (1936年3月)</b>		<b>第4巻第8号 (1936年8月)</b>	
新戒律運動の基調 浅野研眞	2 頁～5 頁	新興類似宗教批判 浅野研眞	2 頁～12 頁
佛教社会学学院小誌	7 頁～11 頁	新刊紹介 誌友通信 編輯雑記	13 頁～15 頁
新刊紹介 誌友通信 編輯雑記	12 頁～16 頁		
<b>第4巻第4号 (1936年4月)</b>		<b>第4巻第9号 (1936年9月)</b>	
「隠れたる佛教社会事業家」を顕彰せよ 浅野研眞	2 頁～5 頁	国定教科書と宗教々材 浅野研眞	2 頁～6 頁
「間引」小考 浅野研眞	6 頁～9 頁	編輯雑記	7 頁
青年学生の宗教的展望 奈良敬蔵	10 頁～13 頁	<b>第4巻第10号 (1936年10月)</b>	
新刊紹介 誌友通信 編輯雑記	14 頁～16 頁	現代支那佛教の点描 浅野研眞	2 頁～6 頁
<b>第4巻第5号 (1936年5月)</b>		現代支那の育つ類似宗教 浅野研眞	7 頁～10 頁
宗教復興から宗教教育へ 浅野研眞	2 頁～4 頁	“撃聯”解散宣言	11 頁
療養所だより 山路節子	5 頁	佛教新興会創立趣意書	12 頁～13 頁
満州国だより 半谷範成	6 頁	誌友通信 編輯雑記	14 頁～16 頁
撤空俊玉上人 網田義雄	6 頁		

**第4巻第11号（1936年11月）**

支那にも転向者あり		
	浅野研眞	2頁～13頁
『間引』報告	細谷則理	14頁
新刊紹介	編輯雑記	15頁～16頁

**第4巻第12号（1936年12月）**

邪教の伸び行く経路		
	浅野研眞	2頁～3頁
東北佛教の点描		
	浅野研眞	4頁～6頁
朝鮮を貫走して		
	浅野研眞	7頁～8頁
小学教育と宗教教材		
	谷本富	9頁～10頁
『撃聯』の戦闘報告		
	松本小四郎	11頁～12頁
誌友通信	編輯雑記	13頁～15頁

**第5巻第1号（1937年1月）**

祖師○仰の真意義		
	浅野研眞	2頁～4頁
浅野研眞著『青年の佛教読本』を評す		5頁～10頁
『青年の佛教読本』	谷本富	
『青年の佛教読本』を愛す	梅原眞隆	
濁世に欣求浄土の望み	井関孝雄	
『青年の佛教読本』を読む	禿諦住	
『青年の佛教読本』を読んで	江都鴨村	
『青年の佛教読本』中外日報批判		
『青年の佛教読本』を読む	円谷弘	
誌友通信	編輯雑記	13頁～15頁

**第5巻第2号（1937年2月）**

邪教と正教	浅野研眞	3頁～5頁
佐田介石の憂国社創立序文		
	浅野研眞	6頁～8頁
邪教撃滅聯盟会計報告		9頁
佛陀社青年会記事補遺		10頁
新刊受領図書紹介		11頁
誌友通信	編輯後記	15頁

**第5巻第3号（1937年3月）**

聖徳太子と社会事業		
	浅野研眞	3頁～14頁
佐田介石の追憶	秋山弥助	15頁
編輯後記		16頁

**第5巻第4号（1937年4月）**

皇道佛教について		
	浅野研眞	3頁～5頁
佐田介石の魁益社同盟帳緒言		
	浅野研眞	6頁～7頁
私の信念	長野重治	8頁
満州だより	藤井晋	9頁～10頁
新刊受領図書紹介	誌友通信	編輯後記
		12頁～15頁

**第5巻第5号（1937年5月）**

農村寺院と農繁期託児所		
	浅野研眞	2頁～3頁
佐田介石の墓碑は5ヶ所		
	浅野研眞	4頁～5頁
新刊紹介	誌友通信	編輯後記
		6頁～7頁

**第5巻第6号（1937年6月）**

布施論	浅野研眞	2頁～4頁
農村寺院と医療施設		
	浅野研眞	5頁
新刊紹介	誌友通信	編輯後記
		6頁～7頁

**第5巻第7号（1937年7月）**

宗教に於る“日本的なるもの”		
	浅野研眞	2頁～3頁
新刊紹介	誌友通信	3頁
没落する“ひとのみち”教団		
	浅野研眞	4頁～6頁
編輯後記		7頁

**第5巻第8号(1937年8月)**

尊由聖人の“還俗”	浅野研眞	2頁
非常時と社会事業	浅野研眞	3頁
巴里通信	松尾邦之助	4頁～5頁
新刊紹介	誌友通信 編輯後記	6頁～7頁

**第5巻第9号(1937年9月)**

北支事変と支那佛教の動向	浅野研眞	3頁～7頁
北支の宗教を語る	浅野研眞	8頁～10頁
邪教の後始末	高見之通	11頁
新刊紹介	質疑応答 誌友通信 編輯後記	11頁～15頁

**第5巻第10号(1937年10月)**

国民精神総動員の一考察	浅野研眞	4頁～5頁
千人針と禁煙・禁酒	岡田道一	6頁～7頁
佛教的社会観	浅野研眞 著, 石 尤風 訳	8頁～10頁
貧強雑誌『佛陀』	志賀静丸	11頁
我等佛徒の誓ひ	浅野研眞	12頁～13頁
『佐田介石全集』の刊行に就いて(広告)		14頁～15頁
北支戦線だより	藤井 晋	16頁
北平の魅惑	浅野研眞	17頁
祝發刊滿五十号(広告)		
佛陀(滿50号)に寄せて	谷本富・高島米峰他	22頁～25頁
誌友通信	新刊紹介	26頁
編輯後記		31頁

**第5巻第11号(1937年11月)**

人の道の懺悔録	浅野研眞	2頁～4頁
念仏と大尉未亡人	浅野研眞	5頁
誌友通信	編輯後記	6頁～7頁

**第5巻第12号(1937年12月)**

淫祀と邪教と迷信	浅野研眞	2頁～4頁
北支従軍僧だより	井上淳念他	5頁～6頁
誌友通信	編輯後記	7頁～8頁

**第6巻第1号(1938年1月)**

“防共聖戦”の核心	浅野研眞	2頁～5頁
渡暹の壮図を祝す		6頁
誌友通信	新刊紹介 編輯後記	7頁～8頁

**第6巻第2号(1938年2月)**

新興シャムの横顔	浅野研眞	2頁～3頁
教団の現状を憂ひて	兩宮一恵	4頁
新刊紹介	誌友通信 編輯後記	6頁～7頁

**第6巻第3号(1938年3月)**

真如法親王の奉讃	浅野研眞	2頁～4頁
シャム佛教の印象	浅野研眞	6頁
新刊紹介	誌友通信 編輯後記	6頁～7頁

**第6巻第4号(1938年4月)**

支那佛蹟の復興	浅野研眞	2頁
大亜建設と宗教工作	浅野研眞	3頁
シャムと北支から		4頁

- 新刊紹介 誌友通信 編輯後記  
5頁～7頁
- 第6巻第5号（1938年5月）**  
八紘一字の新意義  
浅野研眞 2頁  
日本三景を点描する  
浅野研眞 3頁～4頁  
四国遍路の今昔 5頁  
新刊紹介 誌友通信 編輯後記  
6頁～7頁
- 第6巻第6号（1938年6月）**  
移植民政政策と宗教工作  
浅野研眞 2頁～7頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
7頁～8頁
- 第6巻第7号（1938年7月）**  
『佛物』思想を高揚せよ  
浅野研眞 2頁～3頁  
一家一萬円の賽銭貯金  
浅野研眞 4頁～5頁  
北支だより 浅野研眞 5頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
6頁～7頁
- 第6巻第8号（1938年8月）**  
日本文化の宗教面  
浅野研眞 2頁～3頁  
同大・谷大・京大一入洛講演行の印象一  
浅野研眞 4頁～5頁  
親鸞教に随順して  
湊七良 6頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
6頁～7頁
- 第6巻第9号（1938年9月）**  
日本文化と日本佛教  
浅野研眞 2頁～3頁
- 樺太教界の印象  
浅野研眞 4頁～5頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
6頁～7頁
- 第6巻第10号（1938年10月）**  
東亜政策と宗教問題  
浅野研眞 2頁～6頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
6頁～7頁
- 第6巻第11号（1938年11月）**  
東亜政策と宗教問題（下）  
浅野研眞 2頁～6頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
7頁～8頁
- 第6巻第12号（1938年12月）**  
長期戦下の求道  
浅野研眞 2頁～3頁  
佛物思想に感銘す  
鎌尾清 4頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
5頁～7頁
- 第7巻第1号（1939年1月）**  
東亜共同体と宗教  
浅野研眞 2頁～7頁  
神も佛も 無々子 8頁～10頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
12頁～15頁
- 第7巻第2号（1939年2月）**  
時局と死の問題  
浅野研眞 2頁  
佐田介石の電報 3頁  
誌友通信 新刊紹介 編輯後記  
4頁～7頁

**第7卷第3号 (1939年3月)**

新東亜建設と宗教

浅野研眞 2頁～3頁

佐田介石の建白を読む

谷本富 4頁～6頁

誌友通信 新刊紹介 編輯後記

6頁～7頁

**第7卷第4号 (1939年4月)**

信仰は不合理か？

浅野研眞 2頁～3頁

北支だより 藤井晋 4頁

誌友通信 新刊紹介 編輯後記

5頁～7頁

**第7卷第5号 (1939年6月)**

大乘的婦道 浅野研眞 2頁

「神道社会学」について

浅野研眞 3頁～6頁

誌友通信 新刊紹介 編輯後記

6頁～7頁